

# 埼玉の夜明け

巻号 42  
第1号  
通算 130号

団教会 埼玉地区  
委員会  
キリスト教  
社会 関係社



## 東日本大震災・被災地訪問

### (1) チーム・ジェリーフィッシュ

十日町教会牧師 新井 純

「チーム・ジェリーフィッシュ」4月初め、3度目の被災地訪問の時に一緒に行動していた仲間たちと、自らをこう命名しました。ジェリーフィッシュとはクラゲのこと。潮の流れに身を任せながら漂うクラゲのように、自らの意思ではなく、訪れた先の状況や求めに応じて常に臨機応変に対応していこうという姿勢から名付けられました。

声や情報を集め、整理し、必要に応じて発信することはとても重要だと思っていますし、被災地を応援してくださるたくさんの方々を求めているのが、「何が必要なのか?」「どこに行けばいいのか?」という情報ですから、いち早くこれにできる役割を担うことを第一に考えています。

「マニユアルを作つて欲しい」というお声を多数いただいたいきましたが、私たちは行政のような動きはできませんから、マニユアルというものの必要性は感じていません。兵庫教区被災者生活支援長田センターの柴田信也主事の言葉を借りるなら、「災害には個性がある」ので、その時々に応じた臨機応変な対応が必要だと思うからです。その結果、被災地を訪れる時はほぼノープランで、見て、話して、感じて、次に何をするのかを祈り求めていくことになりました。それで、自らをジェリーフィッシュと表現するのです。

最近読んだある紙面に、東北教区被災者支援センターの立ち上げから中心的な役割を果たしておられる片岡舘也牧師が「被災地の匂い」について記しているのを読みました。これは、テレビや新聞では伝えられず、こちらも感じることもできないものを象徴して表現してきました。いわゆる雰囲気のような意味合いを含みます。被災の現場に立つと、これを嫌が応にも感じるようになります。そこから、具体的な初動のアイデアが浮かんでいきます。

例えば、被災支援活動に支援物資は欠かせませんが、その中の古着というのは極めて難しい性格を持つています。着古されているとか、シミや汚れがあるという問題の他に、各人の好みやセンスの問題もあるからです。しかし、今回の東日本大震災では、津波被害によって家ごと失われた避難者が大勢おられ、その多くは着の身着のまままで逃げてきておられます。お

### (2) 避難所の人々の身体と心のリフレッシュ

深谷西島教会牧師 竹内紹一郎

一三日朝、古着の「フリーマーケット」や、焼きそば、焼き肉、フランクフルト、餅つき、「炊き出し」の準備に忙しい一六名の仲間を横目に、大宮教会の佐治範子姉と私は一台のワゴン車に韓国教会の送って下さったミネラルウォーター三〇〇本、男性・女性下着約一〇〇人分、日用雑貨、それに東北道近くのドラッグストアで調達した風邪薬等を積み込

み、大船渡市役所の許可書を持って、車で約一時間離れた市内北部の三陸町の避難所を訪れました。先月下旬に取り付けたばかりの中古カーナビを頼りに、午前中は「南区会館」(避難者一三名)を訪問、ミネラルウォーターと下着を約二／三と風邪薬や日用雑貨を少しお届けしました。あいにく多くの方々々が仕事や用事や学校など

財布さえ持たないで避難している方も多かったでしょう。つまり、着替えが極端に不足している状態でした。テレビの報道を見ていてもそれは想像できます。でも、その想像だけで古着を集めて被災地に送るだけの支援では、被災地は困ってしまいます。

善意は、それを受ける側の思いと一致して初めて生きたものとなります。良かれと思うものを押し付けるだけでは、単に自己満足に過ぎません。このたびの埼玉地区の皆さんのお働きは、皆さんの善意と現地のニーズが見事にマッチした素晴らしい支援活動でした。「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい(ローマの信徒への手紙12章15節)」同じ思いになることから始まる生きた支援のために、今後被災者の方々の声に耳を傾け続けたいと思います。道は主が備えてくださいます。

で外出されていましたが、近隣で被災された方々にも声を掛けますと総勢一九名が集まり、佐治姉がインストラクターとなって身体と心を和らげて元気にしていただく体操をする時が持たれました。最後は、ユニークな新造漢字の楽しいクイズで心も和ましていただき、避難所に集まった方々は皆、満面の笑顔になりました。

午後は、「南区会館」から数キロ離れた「特産品生産施設」(避難者四八名)を訪問しました。この避難所も昼間は多くの人が外出

されていきました。また持参した物資は、同「施設」に十分な備蓄があるとのことで受け入れを辞退されました。佐治姉は、体操ではなく残っていた小学生三名と「かるた」等で楽しく遊ぶ時をもちました。

自宅と全財産のみか大切な家族、近親者をも失う未曾有の大災害に遭われた方々の心の痛みは計り知れませんが、思いつめた状態から、「一時(ひととき)、身体をほぐし、心を柔らかくして復興に取り掛かっていただくことは大切



車に積み込まれた品々

だ」と思いつつ、再びカーナビを頼りに大船渡教会に帰りました。

### (3) 東日本大震災に 宗教はどう向きあうか

草加教会 谷脇 正紀

一、はじめに

奥羽教区大船渡教会を会場とした埼玉地区の被災地支援活動の第一日目の夕刻、村谷正人牧師や役員、横澤和司兄、宮城県内でボランティア活動をしていた三人の教職を交えて、しばしの交わりの時をもった。その際、中部教区如鷲(じょしゅう)教会の中島聡牧師から、多数の犠牲者の弔いについて、特に火葬場において茶毘に付すに際して、弔いの儀式を持つこととの出来ない状況を憂い、宮城県宗教法人連絡協議会に属する僧侶が中心となって仙台市に申し入れをし、市長の許可のもとに火葬場での諸儀礼が宗派・宗教を超えて行われていると報告された。私は、中島牧師より、この働きに参与している東北教区仙台市民教会の川上直哉牧師をご紹介いただき、連絡を取り合う中で「心の相談室」の立ち上げを知った。

二、「心の相談室」設立の理念とは

本来、死者の弔いは宗教者の責務であったが、未曾有の大量死の現実直面した時に、「弔い」は、全ての宗教者にとって、宗派教派を越えて広く取り組むべき課題となった。弔いの諸儀礼を行う一方で、遺族に対する心のケア、さらに生活再編にまで至る包括的な支援を宗教者が共有し提供していくことが「心の相談室」の設立理念になっている。この活動は、人間にとつての宗教の意味を社会に広く知らしめるものであり、宣教や布教活動を目的としない。

三、「心の相談室」設立記念講演会に参加して学んだもの

去る五月七日、「心の相談室」の設立記念講演会が、仙台市の東北大学片平キャンパスで開催され、心理学を専攻する長女恵理香とともに出席した。「心の相談室」で行う心のケアとは、喪失体験後の悲嘆(グリーフ)ケアである。

### 主張

東日本大震災は莫大な被害をもたらした。政府は原子力発電所の事故のIAEAへの報告で津波や原発事故への対策等、不備を全面的に認め反省した。これに関連し、事故を起こした東京電力と原発行政を進めてきた自民党の無責任さを痛感している。

まず東京電力だが、今回の地震はマグニチュード(M)9と想定外の大きさだった。津波も一四・五m(東電発表)と想定外とのこと。中越地震の際の柏崎原発でもそうだったが、これらを簡単に想定外で片付けてもらいたくない。M8位の地震を想定し、防潮堤を五・七mとしたそうだが(細かな責任体系は分からないが)地球上ではM9クラスは百年に四回位だそう。原発事故は大事故になると分かっていながら何故M8なのか。釜石市民は一〇mの防潮堤を築いたが破られた。原発側はより堅固さを求めるべきではないか。他にも自家発電装置の設置や事故を想定したロボット開発の放棄、相次ぐ発言の取消し等あまりにも甘

すぎる。

次は自民党である。事故発生時の菅首相の海水注入問題では、この時とばかり現政権への追求に終始した。問題点の追求はいいが、原発行政への自省は何も聞こえてこない。そもそも議員の数に任せ原発を導入、推進したのは自民党だ。原発企業から自民党への政治献金は一年間で六五億円だという。これでは問題点の追求等出来るはずがない。企業献金は撤廃すべきだと考える。導入だけでなく安全管理まで責任を持つべきだ。中曽根元首相と現自民党原発推進派の意見が新聞記事に出ていたが謝罪や反省の弁は全くない。それどころか早くも今後どのように推進するかが先行し、原発ありきだ。戦争責任をうやむやにしてきたと同じようにしてしまうのだろうか。

この福島原発事故を機にドイツでは二〇二二年までに原子力発電所を全面的に閉鎖するという。日本も脱原発、自然エネルギーへの転換、節電社会を望む。

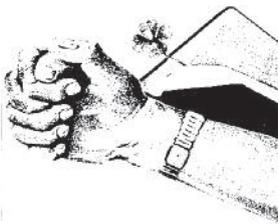
悲嘆の誘因となる喪失とは、愛する者の喪失、所有物の喪失、環境の喪失、役割の喪失、プライバシー（自尊心）の喪失、身体（健康）の喪失、社会生活の安心と安全の喪失などである。生活史の中でも、愛する者の生死に関わる事件に遭遇すれば、「急性ストレス障害」(ATSD)や「外傷性ストレス障害」(PTSD)などの内面的ストレスに苦しめられることになるという。しかし、遺族（被災された方々）は、悲嘆の誘因となる喪失を一瞬に重複して体験していることから、想像を絶するような深く強い悲嘆の状態に陥っていることになる。それゆえに、ケア提供者は限らない思いやりと、相手に対する尊敬と信頼をもって接する必要がある、そのための心構えとしてもっとも大切なものは、提供者が各自で持っている「人生観」（どう生きるのか）、「死生観」（必ず死を迎える）、「宗教観」（死後、どうなるのか）であり、生きること死することの概念とその意味を分けることが必須となる。それらを強く信じている全宗教者は、深く強い悲嘆のうちにあり方々のグリーフケアに協力することが可能となることを学んだ。

四、心に残った逸話

上智大学グリーフケア研究所 長高木慶子氏が「キリスト教の立場からみたグリーフケアの役割・可能性」と題して講演した中に、心に残る逸話があった。ある若い住職が高木氏に、「先生、これから被災地に行くけれど、何をしたらいいのだろうか」と尋ねた。高木氏は逆に僧侶に尋ねられた。「あなたは、被災地に行つて何をされるのか」と。「瓦礫やヘドロの撤去、炊き出しとか……」。「あなたは僧侶でしょう。あなたにしか出来ないことをおやりなさい。瓦礫の上に、花が手向けられていれば、そこで足を止めて、読経しなさい。被災地の海に向かって、読経しなさい。」彼はその言葉通りに、手向けられた花の前で読経し、海に向かって読経した。すると、どこからともなく、彼の周りに人が集まり、合掌して涙を流されて、口々に感謝を告げたという。川上牧師は、「心の相談室」の設立理念の中で、「弔いとグリーフケアの一体化というスキーム」について語っておられたが、上記の逸話は、このスキームの現実化であると思わされる。

五、終わりに

「心の相談室」の活動は、宗教者の弔いを手始めに開始されたが、被災された方々への包括的な支援を展開していく中で、今後は宗教者に限定されず、グリーフケアの専門家、医療、生活支援の専門家が参加していくであろう。被災地支援の長期化に向けて、「心の相談室」の活動に対応するよう、さまざまな領域での支援活動がすでに各地で展開されている。被災された方々が孤立せず、回復・復興に向かっていけるように、種々なる支援の活動が、個別の活動に終始するのではなく活動の拡充と多様な局面に対応できるように相互に情報交換していく作業が必要であろう。私も、牧師とされているからこそ為すことのできる被災者支援の道を模索していきたい。



本の紹介

絵本「津波!!命を救った稲むらの火」

(小泉八雲原作、高村忠範文・絵、汐文社、二〇〇五)

東所沢教会牧師 深見 祥弘

東日本大震災から二ヶ月が過ぎようとする頃、教会員からある絵本をいただきました。それは、「津波!!命を救った稲むらの火」(小泉八雲原作、高村忠範文・絵、汐文社)という絵本でした。私はこれを受け取った時、「あつ、これだ」と思いました。

私がキリスト教の集会に初めて出席したのは、中学一年生の時でした。英語塾の先生から、夕涼みの集会に誘われたのが、最初でした。その集会で一六ミリのアニメーション映画を見たのですが、それはこんな内容でした。(ある時、村の庄屋が高台の家から海を見ていると、海の水がどんどん沖に向かって引いていくのに気づきました。村人たちは干上がった磯で魚や海藻を採ろうと、海に出ていました。庄屋はこれを見ると、まだ穂の付いたまま干してあった稲むらに次々と、火を点けました。これに気づいた村人たちは、

「庄屋さんの家が火事だ」と呼びかけ合つて高台に集まつてきた時、津波がきました。村は津波によってすべて流されましたが、庄屋の機転で村人は助かったのです。私はそれが実際あったことなのか、作られたお話なのか解りませんでした。私の心には、ずっとこの話が留まっています。そして、大津波のあった今年、四〇年ぶりにこのお話に再会したのです。

この絵本の解説を読んで解つたことが、たくさんありました。その出来事は、私の故郷和歌山で実際にあった出来事でした。一八五四年(安政元年)二月二三日、「安政の東海地震」(M8・4)、翌日二四日、「安政の南海地震」(M8・4)が連動して発生し、房総から九州までの沿岸部が津波に襲われました。それは最高三〇mをこえる津波でした。絵本は紀州藩広村(現・和歌山県有田郡広川町)で起こったことを書いています。庄屋も浜口儀兵衛(一八二〇〜一八八五)という実在の人物で、当時三四歳でした。彼は、津波で被災した村人のために私財を捧げて、にぎり飯の炊き出しや仮設住宅の建設をしました。また、仕事を失った漁師や農民のために堤防の建設を行いました。この堤防は「広村堤防」と呼ばれ、



### 活動方針

一九四六年に発生した「昭和の南海地震」の津波から村人を守りました。そして、この出来事をもとに、小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）が「A LIVING GOD」と題する物語にして、一八九七年ボストンとロンドンで出版しました。

今回の震災でも、人の命を守り救った人々のこと、復興のために懸命に働いている人々のいることを、私たちは知っています。この絵本に書かれている先人たちの働きは、今回の震災で被災された方々や、そうした方々に仕え働いている人々に、そして、自分は何もできないと思っている人々に、元気を与えてくれるでしょう。

川口教会 本間 一秀

「埼玉の夜明け」前号で記したように、昨秋行われた教団総会において、米軍基地に関する議案、沖縄との合同問題に関する議案、セクシャルマイノリティーに関する議案等は全て否決された。これ

らの結果は全て会議開催の前から予め全国的に配布されていた「伝道する日本基督教団の形成のために」という、「対策、指導書」と思える冊子にまとめられた通りになった。「×否決しましょう」との指示通り、ロボット化されたように採決された。教団を整えようとする建設的な議案、意見を抹消し、教会会議制に沿った真摯な充分な議論もされなかった。少なくとも各教区の方々がそれぞれの痛みを覚え、真摯に研鑽、論議を重ねた上で提案された議案である。余りにも無残であり残酷な「審議？」であった。

申命記七章六節～八節には、「小さき者に降る神」ということが明確に示されている。「神による選び」の思想であるが、これは特権意識を産み出すものではなく、我々人間に神に対する深い責任が問われているのである。神の前に謙虚であるべきである。そうであるならば、神から託されたこの地球、社会をどのように建設して行くべきであろうか。少なくとも、あの教団総会のような、暴挙は厳に慎むべきではないか。信仰者として、神から重要な使命を託された教職として恥ずべきことではないか。

私たち社会委員会に託された使命、それは、この地球を神の国と

為す為に、宣教の一翼を埼玉地区において担うことと信じて止まない。それには何を為すべきか。

「ブループラネットを核で汚染させてはならない」今年度の「環境問題講演会」の演題である。「美しい大地は私たちの神が与えられた恵、貴い贈り物」である。原発問題で揺れる私たちの社会。「神の恵み、貴い贈り物」としての認識を強く呼びかけて行きたい。

又、沖縄との合同の捉え直しの問題は関東教区としても積年の課題である。「実質化」に向けた第一歩を歩み始めたい。本年度は八・一五集会上に沖縄教区から平良修牧師をお迎えし、講演をお願いする。懇談の時間が持たれる。講師も語り合うことを楽しみとされている。

私たち社会委員会の働きが、この埼玉地区にあつて主の御栄を表すものとなるよう希望して止まさない。

### 社会委員会報告

(二〇一一年度)

- 第一回社会委員会四月二四日(日)十六時(川口教会)出席者八名 欠席者二名
- 委員及び組織について  
委員長 本間一秀(川口)
- 書記 岩井田慎二(埼玉和光)
- 書記 後藤龍男(和戸)
- 会計 飯野敏明(本庄)
- 委員 岡村紀子(北鴻巣集會)
- 黒川 元(上尾合同)
- 篠原節子(鴻巣)
- 土橋 誠(地区委員(飯能))
- 深見祥弘(東所沢)

- 第五回社会委員会  
一月十五日(日) 十五時(埼玉和光教会)
- 社会活動予定  
※環境問題講演会  
七月十七日(日) 十五時(十七時) 大宮教会 参加費五百円
- 講師 平沢功牧師(北千住教会)
- テーマ・「原発事故に関して」
- ※八・一五集会  
八月一五日(月) 十時(十二時) 大宮教会 参加費五百円
- 講師 平良修牧師(沖縄)
- テーマ・罪責、基地問題
- 環境問題講演会の持ち方について話し合う。
- 第二回社会委員会  
六月二六日(日) 十六時(川口教会)
- 出席者九名 欠席者一名
- 環境問題後援会、八・一五集会の打ち合わせ
- 小委員会報告

### 平和を求める八・一五集会

日時 八月一五日(月)  
午前十時～十二時

会場 大宮教会

講師 平良 修牧師(沖縄教区)

講演 「沖縄・沖縄教区から見える日本国・日本基督教団」

懇談会(希望者) 一時～三時

上尾合同教会

- 協力委員 浅子和夫(和戸)
- 小委員会分担(○は招集者)  
(平和と天皇制問題)
- 本間 岡村 篠原
- (部落差別問題と人権問題)
- 後藤 岩井田 本間(環境問題)
- 黒川 本間
- (「埼玉の夜明け」編集)
- 浅子 飯野 深見

- 今後の委員会予定等
- 第二回社会委員会  
六月二六日(日) 十五時半(川口教会)
- 第三回社会委員会  
八月十五日(月)午後 大宮教会
- 第四回社会委員会  
十月十六日(日) 十五時(上尾合同教会)

### 編集後記

三月十一日の巨大地震は、大津波と原子力発電事故を引き起こし、東日本の太平洋沿岸地域に未曾有の大災害をもたらした。

そこで今回の「埼玉の夜明け」は急遽、大震災に関する記事を柱に編集することとなった。

被災地に入られた三人の牧師さん方にはお忙しいところ記事を寄せていただきました。感謝です。

(浅子)